

教 仏 庵 草

第179号

(発行日)

2005年5月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX

(0798) 63-4488

(発行人) 土井紀明

<http://www.eonet.ne.jp/~souan>

mail:kousien2720@yahoo.co.jp

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

.....

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○真宗共学会――毎月第一と第三木曜日午後7時より。

*8月22日同朋の会および8月12日念仏座談会は休みます

真宗問答⑪ 弥陀たのむは今の救い

M 「阿弥陀仏の前身である法蔵菩薩様は万人を平等に救おうと願いたたれ、そのために五劫の間思惟され、浄土に生まれる道によって一切衆生を救おうと誓われたとお聞きしています」

D 「ええ、そうです」

M 「浄土に生まれる道とは、死して浄土に生まれて佛になるということですね」

D 「ええそうです」

M 「そこで日頃から、疑問に思う点なのですが、なぜ(死後に浄土に生まれる)といわれねばならないのか、そこがどうもよくわかりません」

D 「現代人の感覚からは、死んで浄土に生まれるというのは受けとりにくいのでしょうか。そこでまず浄土についてですが、世親菩薩は『浄土論』に

かの世界の相を観ずるに、三界の道に勝過せり。究竟して虚空のごとく、広大にして辺際なし。

と述べておられます。浄土は広大で辺際がない、すなわちほとりがない。どこまでいっても浄土にきわがない。どこどこまでも浄土である、といわれています。ですから浄土のことを無量

光明土ともいいます。ここで三界とは迷いの世界、その世界を浄土は勝過(超越)しているといわれるのです」

M 「際のないのが浄土ということでしたら、十方世界、浄土ならざるはなし、ということですね」

D 「そういうことです」

M 「そうすると、たとえばいまここの場も浄土であるといえますね」

D 「そうですね」

M 「けれども私たちにはこの世界がとて浄土と思えません。この世界は欲望がうずまき争いがたえまません。浄土らしきものは見えますか」

D 「ええ、私もこの世が浄土とは思えませんし浄土が見えませんが。ただ覚りを完全に開かれた仏陀はこの世界は本来浄土であると感得されているのですね。このことは『維摩経』(仏国品)に詳しく説かれています」

*
M 「そうするとこの世界は本来浄土であることは仏陀には知られているけれど、私たちには知られていない。なぜ私たちにはわからないのですか」

D 「私たちの心の眼は煩惱によって深く汚染されているからです。正信僂にも

煩惱、眼を障えて見たてまつらず

とあって内なる煩惱に心の眼がさえぎられて如来・浄土が認得できないと仰せられています。たとえてみれば、太陽がさんさんと私を照らしていても、私が目をつぶっておれば、私は陽光のまっただ中にもわからず、聞しか知られないようなものです。『浄土和讃』にも私たち煩惱具足の凡夫のことを

世の盲冥

と仰せられ、心の眼が盲目でくらくらといわれています」

M 「煩惱がない仏陀の眼には清浄な光明世界がはっきりと知られているのですね」

D 「そうですね。知る心と知られる世界は別のもではないというのが仏教でいう縁起の道理です。皆それぞれが感じている世界は、それをそうと感知する心と一つの事実なのです。いつてみれば私たちは自らの心(知)の性質に応じた世界しか感じられないのです。ですから、佛の智慧の眼を得る(佛になる)ことと仏の世界(浄土)を感知することとは一つのことです。私たちが穢土としてしかこの世界を感じていないのは私たちの煩惱の心のゆえです」

M 「そうすると煩惱の有無あるいは煩惱の程度によって感じる境界がことなるということですね」

D 「そうです。ただ、煩惱によって感じる世界は本来ありのままの世界ではなくして、煩惱によって色づけされた世界、虚構された世界であるといわれています。ですから煩惱がある間は認識している世界に虚構性があるといわねばなりません」

M 「要するに煩惱の色眼鏡によって知られている世界は非本来の虚構された状況であり、それに対して煩惱のない佛智で感得されている世界は純粹な本来の領域すなわち浄土なのですね」

D 「そういつていいと思います」

M 「そうすれば仏の智慧の眼を得ればいいのですね」

D 「ええそうです」

M 「どのようにして佛智を得ることができのでしょうか」

D 「それが仏道修行というものです。浄土を宗教行によって感知していく、それによって煩惱が浄化され、智慧が深まっていくという道があります。こういう仏道修行を聖道門といえます」

M 「宗教的実践なりによって今ここ、足下の本来の浄土に目覚めていくという聖道門の道があるということですね」

D 「ええそうです。ですから聖道門では(いまここの純粹事実である浄土に目覚めよ)、あるいは(人のいのちは本来清浄な佛

のいのちであると悟れ」などと
いいいます」

M「浄土真宗はこういう今この
の純粹な真実に目覚めていこう
する道とは違うのですね」

D「異なっています。今この
浄土や仏のいのちを悟るとか目
覚めるといふようなことは浄土
門である真宗ではいわないの
です」

*

M「なぜ、浄土門ではいわない
のですか」

D「今この真実そのもの（浄
土）に目覚めることは至難のこ
とであり、よほど直観力に優れ
た人とか宗教行の厳しさに耐え
れる人とか、そういう特別な人
には可能であっても、一般人の
にはとてもついて行ける道では
ないからです。それでそういう
道を難行道（なんぎやう）とい
うのです」

M「では浄土門はどうなの
ですか」

D「阿弥陀仏が私たちに「かな
らず浄土に生まれさせて佛にす
るから、わが弥陀にマカセヨ」
と仰せられる、仏の仰せにおま
かせして弥陀に助けられるのが
浄土門です」

M「この世で浄土に目覚めるこ
とは至難のことであり、またそ
れは特別の人しかできないから、
（将来かならず浄土の目覚めを
完成させる）という阿弥陀仏の
お約束にしたがう道なのですね」

D「ええ、そうなんです。自覚
や覚りをとても実現できない私

たちを大悲してくださるのです。

大悲ゆえに（目覚めよ）と仰せ
られず、（マカセヨ）（われをタ
ノメ）と仰せられるのです。そ
れはくり返しますが、私たちが
愚鈍（ぐどん）なゆえ、愚鈍な私たちをど
こまでもあわれみたまうからで
す。私たちに（目覚めよ）（悟れ
よ）（自覚せよ）と仰せられるの
なら私どもはついて行けません。

けれども（汝、愚鈍の者よ、わ
れをタノメ、かならず助けるか
ら）という道なら愚かな私ども
もついていきます」

M「なるほど、（必ず助ける）と
いう、将来、実現を約束してく
ださるといふ未来形で仰せくだ
さる、その本願のお言葉は愚か
な私たちを救わんがためなの
ですね」

D「そうです。それを方便とも
うします。しかしその方便は一
般に思われているようなアテの
ない作り事というのでは決して
なく、真実そのものが私たちの
ところまで降りてきて私たちに
手をさしのべて下さる真実その
もののお手立てです。ですから
それを真実方便ともうします。
この真実方便によって私たちに
も道が開けるのです」

M「死後の浄土往生は真実その
ものから出てきた方便なの
ですね」

*

D「しかも、この世で浄土に触
れたとしても、あるいはこの世
で仏のいのちに目覚めたといっ

ても、私がそれで佛になったわ
けではありません。死ぬまで煩
悩を離れない凡夫であり、浅ま
しい生活を離れることができな
いのです。それは以前にも申し
ましたが、この身体は罪の身で
あり、煩惱が形を取ったものだ
からです。ですから、この身体
がある間は私は浄らかな仏にな
ったということを許さない、そ
ういうものがあります」

M「罪の身をかかえている間は
この凡夫がそのまま真の仏であ
るといふことは言えないので
ね」

D「そうなんです。（死して浄土
に生まれて初めて佛になるの
ですよ）と仰せくださるのは、私
どもの現実の身、現実生活の有
様を知り抜いてくださって、身
が滅ぶ（ほろぶ）ことを通して佛の身とな
る、それを（この身が死して浄
土に生まれて佛の身になるのだ）
と教えて下さるのです。この世
で人が佛になるというのはむし
ろ現実を遊離した考えだと思
います。現実を本当に知つたれ
ばこそ、死後の浄土往生とい
うことがいわれるのです。死後の
往生といわれるのが非現実的
ではなくて、むしろ現実的な
ものであるからです。逆に（この
世で浄土に生まれた）というの
は非現実的といえましよう」

M「そうですね。そうすると目
覚める力なき私たちに（自覚せ
よ）とか（気づけよ）と仰せら
れず、目覚められぬ私を知り抜

いて（目覚めることはわれにマ
カセヨ）（助けるで、われをタ
ノメ）と仰せくださる、そこに
そ如来大悲のお心があふれて
るといえるのですね」

*

D「そこで、大事なことは、（タ
ノメ）という仰せにしたがうと
き、はからずも弥陀に触れる、
あるいは浄土の働きに触れると
いうことが起こるのです。不
思議なことですよ」

M「浄土に触れることができな
いものが、できないと知らせて
頂いて（助けるで我にまかせよ）
の仰せにしたがうとき、逆に弥
陀に触れるということが起こ
るのですね」

D「そうですね」

M「阿弥陀仏は死後に浄土に生
まれさせるといわれている、そ
うしたら浄土で弥陀あるいは浄
土を知ると普通は思ってしまう
ますが、そうではなくてこの世
での現在において弥陀に触れ、
浄土のはたらきに触れるので
すね」

D「そうですね。それは（か
ならず助ける）というとお助け
は将来のようですが、かならず
助けると仰せくださる弥陀はい
まここに私とともにいたもう弥
陀なのです。それはちやうど、
新大阪駅のホームにいる私の目
の前に列車が入ってきて（東京
に行きます。どうぞお乗りくだ
さい）と言われて乗るようなも
のです。（東京に連れて行く）と

いう列車に乗る場合、東京に着
くのは未来だけれども、東京に
行くから乗りなさいという列車
はいまこの新大阪駅に来て私
に呼びかけている、いまこの
列車です」

M「浄土に連れて行くと仰せく
ださる弥陀は今ここに来て喚び
たもう弥陀なのですね」

D「そうですね。救いは死ん
でから先に浄土に生まれて初め
てある救いではありません。浄
土に生まれさせようと仰せくだ
さる弥陀に身をゆだねる、その
現在ただ今にすでに救いはある
のです」

M「なるほど浄土に生まれて佛
になるといふ真宗のお助けは未
来にあると思っていました。が、
いまここに既にある。だからこ
その世で救われるのですね」

D「そういう救済の法はじつに
大悲の真実方便が至れり尽くせ
りという感がいたします」

M「わかりました。よく創価学
会の人たちが、真宗の救いは死
後の救いだ」と批判しますが、そ
れは誤解なのですね」

D「そうですね。かといって
（真宗は死後の救いをいわない、
いまここで如来のいのちに人が
目覚めるのが救いだ）という
さつき申しましたようにいつ
いけなくなりません。愚鈍の者が
今ここでどうしたら救いが成就
するか、それを如来法蔵様は五
劫思惟（しゆい）で考えつくされての救済
なのですね」

歎異抄第十八章第四講

仏法のかたに、施入物の多少にしたがいて、大小仏になるべしということ。この条、不可説なり、不可説なり。比興のことなり。まず仏に大小の分量をさだめんことあるべからずさうろうや。かの安養浄土の教主の御身量をとかれてさうろうも、それは方便報身のかたちなり。法性のさとりをひらいて、長短方円のかたちにもあらず、青黄赤白黒のいろをもはなれなば、なにをもつてか大小をさだむべきや。念仏もうすに化仏をみたてまつるといふことのさうろうなるこそ、「大念には大仏をみ、小念には小仏をみる」といえるが、もしこのことわりなごにばし、ひきかけられさうろうやらん。

(歎異抄第十八章より)

*

今回はここまでの節の中で、「念仏もうすに化仏をみたてまつるといふことのさうろうなるこそ、(大念には大仏をみ、小念には小仏をみる)といえるが、もしこのことわりなごにばし、ひきかけられさうろうやらん。」の一節について述べます。この現代語訳は

「念仏すると、仏のすがたを見させていただくことがあるそうです。そのことは教典に、(大きな声で念仏すれば大きな仏を見、小さな声で念仏すれば小さな仏を見る)とあるのですが、あるいはこの説などにこじつけて、大きな仏や小さな仏になるなどというのでしようか」となりましよう。

*

この章で、唯円様は仏に大きな仏だの小さな仏だのと大小をいうのは間違いであると述べておられますが、なぜ仏に大小をいうようになったのか、それは浄土のお聖教の中に「大小の仏」ということがいわれていますが、その言葉は無造作に引つ張ってきて「施入物の多少にしたがいて、大小仏になる」というように、布施などの多少にひっかけて、大きな仏になったり小さな仏になったりするというようなことを異義者はいふのであろうと、唯円様は批判されているのです。

「大小仏」といふようなことが、お聖教のどこに出でくるかという時、当時、浄土に往生しようとする人たちによく読まれていた源信僧都の著作『往生要集』の中に、

「大集(経)の日藏分にのたまはく、(大念は大仏を見る、小念は小仏を見る)と。大念とは大声に仏を称するなり。小念とは小声に仏を称するなり」とあり

とありますが、この大集経(日藏分)にてくる大念、小念という言葉は「施入物の多少」に勝手にくっつけて、「仏法のかたに、施入物の多少にしたがいて、大小仏になるべし」というようなことをいいたしたのでありましよう。

さて「大集経」の日藏分の中に出てくる(大念は大仏を見る、小念は小仏を見る)といふのはどういう意味かということについて、善導大師のお弟子である懐感禅師(7世紀)は、心をしずめて浄土や浄土の仏菩薩を観想する修行の中で、大きな声で仏の名を称えれば、大きな仏のお姿(化仏)が観想の中に現れてくださり、小さな声で念仏すれば観想の中で小さな仏の姿を見ることができると解

釈されています。ですからこの場合の仏の大小というのは、観想の修行において行者の心に浮かぶまたは現れる姿ないしはイメージとしての仮の仏の姿における、形の大小であつて、真の仏のことでありませぬ。ですからそういう観想の中で見られた仏は仮に形をとつた仏すなわち化仏であります。何らかの形を取つた仏は人間の想念に応じた化身の仏といわれています。

こうした日藏分に説かれている化身としての仏における「仏の大小」を異義者は供物や寄進や布施などの「施入物の多少」と結びつけ、その多少によって大小の仏になるのだと、さういふのであろうか、と唯円様は批判されています。

*

さて、話は少し横にそれますが、じつはこの「大集経」の日藏分に出てくる(大念は大仏を見る、小念は小仏を見る)について懐感禅師は

「大集(経)の日藏分にのたまはく、大念は大仏を見る、小念は小仏を見ると。大念とは大声に仏を称するなり。小念とは小声に仏を称するなり」(群疑論)と解釈しておられますが、この釈は法然聖人の『選択集』に引用されています。それには

感師(懐感)の『釈』(群疑論)にいはく、「大念といふは大声に仏を念じ、小念といふは小声に仏を念するなり」と。ゆえに知りぬ、念はすなはちこれ唱(称)なり、と。

とあります。ここで法然聖人はなにを言おうとされるのかと申しますと、弥陀の第十八願の「乃至十念、若不生者、不取正覚」の十念の念は「念と声とは一つのこと」であること、それを懐感禅師のこの文を証拠の一つに引用されているの

です。というのは、(乃至十念の念は心で仏や浄土を想念する念であつて、声に称える念ではない)という批判があるからです。

もし十念の念が心に、お聖教に説かれている通りの仏や浄土を想念する念であつたならば、これは優れた修行者しかできないことになりませぬ。仏や菩薩を心に正しく念じるものを救うという本願であれば、それは特別な人のみが救われるだけであつて、一切衆生を平等に浄土に往生させたいという法蔵菩薩の大悲はかなわぬことになり、当然私どもは救いにあずかることはできません。

ところがこの「念」は声で仏の名を称えるところの称名念仏の念であるとするならば、これは誰でもどこでもいつでも称えることのできる、全くの易行の念仏となり、これによって全てのものが救われる道が開かれます。本願の乃至十念の念は声に称える念であることの証文として、法然聖人は懐感禅師のこの文を選択集に引用されたのです。

それによって「乃至十念若不生者不取正覚」(十念に至るに及ぶまで、若し生まれさせないようなら私は仏陀とならない)「我が名を称えよ、かならず助け」が顕現されることになったのです。

(了)

